

## 「恐れることはない」

司祭 アシジのフランシス 西原廉太

おはようございます。西原廉太と申します。この神戸松蔭女子学院大学のクリスマス礼拝にお招きいただき、大変光栄に思います。さきほどもご紹介いただきましたように、私は立教大学で教えているのですが、神戸松蔭女子学院大学は立教と同じ聖公会の学校です。そういう意味では姉妹関係にある学校です。そんな深いつながりのある学校にお招きいただくのはうれしいことです。

さて、今一度、聖書に耳を傾けてみたいと思います。ルカによる福音書第1章26節から45節の箇所です。

1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。

1:27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。

1:28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

1:29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。

1:30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。

1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。

1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。

1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」

1:34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」

1:35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。

1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。

1:37 神にできないことは何一つない。」

1:38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

1:39 そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。

1:40 そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。

1:41 マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、  
1:42 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。  
1:43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。  
1:44 あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。  
1:45 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

マリアは、ナザレというガリラヤの町に住む、ヨセフという人のいいなずけでした。ある日のこと、突然にも、マリアの前に天使ガブリエルが現れて、こう告げるのです。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

まったく突然のことでした。何のことなのか、マリアはただただ、戸惑うばかりでした。しかし、天使ガブリエルは続けます。

「マリア、恐れることはない。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」

「あなたは身ごもって男の子を産む」。この言葉が何を意味するのか、みなさんお分かりでしょうか。当時のイスラエルの社会にあって、結婚をしていない女性が身ごもるということは、決して許されざることでした。それは、結婚をしていない女性が身ごもるということは、律法という掟で許されていない「姦淫の罪」を犯したということであり、石打の刑に処されるということ、すなわち死刑にされる、ということの意味していたのであります。

マリアは天使に向かい、問い返します。

「どうしてそのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」

天使は答えます。

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」

マリアはみなさんと同じくらいのまだ10代の女性です。自分の胸の動悸と高鳴りを押さえることができなかったことでありましょう。洪水のように自らの体の中を熱い血が流れるのを止めることはできませんでした。不安と恐れの中、マリアは、何日も何日もうなされたのではないのでしょうか。いつ世間にこの事実が知られるとも分からない中であって、ひっそり身を隠し、ぶるぶると震えていました。

マリアにとっては、『マリア、恐れることはない』という天使、すなわち神からの言葉だけが、暗闇の中に光るただ一つのともしびでした。

『恐れることはない』。この励ましに、ついに、ついにマリアは神に応える決心をしました。マリアは天使に応えます。

『わたしは主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように。』すべての運命を受け入れることを決意したマリアは、世の人に見つかれば石打ちにされるという極度の緊

張の中人目を避けて、親類のエリサベトの家を目指します。エリサベトの家までは4日もかかる距離がありました。天使が、親類のエリサベトもまた身ごもっていると告げたことを思い出したからです。今のマリアにとっては、エリサベトだけが頼りでした。取るのも取りあえず、長くて険しい道のりを、人目を避けながら、エリサベトの住む場所へと向かったマリアの気持ちは、どのようなものであったのでしょうか。みなさんもぜひ想像してみてください。

ついにマリアがエリサベトの家に着いた時、二人には言葉などはいりませんでした。二人は聖霊に満たされていた、といます。神さまの力に溢れていた、といます。エリサベトは、マリアにこう語りかけます。『あなたは女の中で祝福された方。』

この時、この瞬間に、マリアは自らの足で立つことができました。聖霊とエリサベトとの出会いが、マリアを励まし、強め、マリアを自らの足で立たせたのです。

マリアは自らの言葉で賛歌を歌うことができました。聖霊に満たされ、エリサベトとの出会いが、マリアに神さまへの賛歌を与えたのです。これこそが有名な、『マリアの賛歌』、『マリア・マニフィカート』と呼ばれるものであります。ルカによる福音書第1章46節から55節の箇所です。

1:46 そこで、マリアは言った。

1:47 「わたしの魂は主をあがめ、／わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

1:48 身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も／わたしを幸いな者と言うでしょう、

1:49 力ある方が、／わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、

1:50 その憐れみは代々に限りなく、／主を畏れる者に及びます。

1:51 主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、

1:52 権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、

1:53 飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます。

1:54 その僕イスラエルを受け入れて、／憐れみをお忘れになりません、

1:55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、／アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

このマリア・マニフィカートは、教会の中でも2000年の間、とても大切にされてきたものです。

身分の低い若い女性であるマリアにこそ、神さまは目を留められました。権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返される神。ここに大切なメッセージがあります。泣いている者、苦しんでいる者、貧しい者こそが、幸いなんだ、という大切な神の逆説が、ここに示されています。

このような苦しみと悲しみの中にある人々に希望を告げる賛歌を歌うことができたのは、他でもない、みなさんと同じくらいの年齢の乙女マリアであったのです。そんな彼女がなぜこのような賛歌を歌うことができたのでしょうか。それは、神さまから「マリア、恐れることはない」と励まされたからです。さらに、「あなたは女の中で祝福された方」と、エリサベトから強められたからです。そして、今、マリアは苦しみと悲しみの中にある人々に希望を告げる者となりました。世間からは、石で打たれようとする、隅に追いやられようとするマリアにこそ、主は目を留められ、悲しみの内にある人々に命を与えられる者とされたのであります。

私は、クリスマスを迎え、そしてこのマリアの物語を読むと、いつも思い出す出来事があります。それは私にとって決して忘れることのできないものです。それは私が大学生の頃の事です。幸いにも学生時代は、友だちに恵まれていました。学生時代にやっていたさまざまな活動を通して出会った友だちが、今でも支えとなっています。その友人たちの中でも、大学のサークル、子どもたちと遊ぶサークルだったのですが、そのサークルで知り合った一人の親友と呼べる友人がいました。彼の名前はM君といいましたが、M君とは本当に何でも話せる友だちでした。M君は、大学の学生寮に住んでいまして、私は自宅生だったのですが、私は彼の部屋を半ば下宿のようにして入り浸り、毎晩のように語りあかしていました。そんなM君が、大学4年生になった時に、彼は私たちと同じサークル仲間、ゆり子さんという女性と婚約をしました。卒業したら結婚することになったのです。ゆりさんは、バプテストという教会の信徒でもありました。

M君には、双子で、別の大学に通っていた弟がいて、お父さんも大学の先生をされておられ、お父さんは人権活動でも有名な方でした。M君親子は、登山が大変な趣味で、ほとんど毎年、冬には剣岳へ冬山登山に行っていました。お父さんは30年以上の登山歴を持つベテランで、私の友人の彼も、中学生から本格的な山登りをやっていました。今からもう28年前になりますが、1986年の12月、彼らはいつものように、剣岳へ出かけていきました。そして12月30日のことでした。忘れもしません。夜中1時頃でした。電話がなるので出てみると、大学の友人からでした。M君親子3人が消息を絶ち、遭難したらしいことをその時、知りました。現地では、早速、捜索隊が生まれ、大学の山岳部の仲間たちも救援に剣岳へ向かいました。お母さん、そして婚約者のゆりさんも同行して行きました。捜索も年を明け、二週間が過ぎた頃、M君のお母さんは、捜索隊の方々に、「ありがとうございました。もう十分です。皆さんの命が大切です」と、捜索の打ち切りを申し出られました。そして、捜索隊員の一人ひとりの手を握り、頭を下げた、とのことであります。当時のテレビや雑誌でも随分、取り上げられましたので、みなさんの御両親などは覚えておられる方がいるかも知れません。

その後、婚約者のゆり子さんは、搜索打ち切りで山から帰ってきてから、ぼろぼろの状態になってしまい、誰とも口もきかずに、家の中に閉じこもってしまう日々が続きました。

その年の暮れ、彼が、剣山に消えてから、丁度1年たった年の暮に、彼女から1枚の短い手紙が大学のサークル宛てに届きました。そこには、このように書かれていました。

「お元気ですか。ごぶさたしています。

わたしは、この間のクリスマスに、教会の礼拝に出ました。聖書の中で、天使が、マリアにこういう場面がありました。

『マリア、恐れることはない。』

私も、恐れずに、がんばって前を向いて、生きて行くことができそうです。」

ゆり子さんは、今、元気に京都で小学校の先生をして、毎日子どもたちの笑顔に囲まれておられます。私たちの神さま、というのは、悲しみと痛みの中にある人々に、『恐れることはない』と励まされるお方です。聖書の言葉には、絶望の淵にある人々に命を与える力があります。みなさん、ろうそくの火、ともしびを思い出してみてください。ろうそくの灯が、一番まぶしく輝くのはどういう時でしょうか？太陽がいっぱい当たる日差しの中でしょうか？電気がいっぱい着いている部屋の中でしょうか？そうではありませんね。そうではなく、ろうそくの灯は、暗闇の中であればあるほど眩しく光輝くのです。私たち一人ひとりも、そのようなろうそくを持っている。私たちが手に持つともしびは、まさに希望のあかりであります。イエスさまの誕生というのは、痛み、悲しみ、苦しみという私たちの暗闇の中に灯された希望と励ましのともしびなのであります。

「あなたは恐れることはない」、なぜならば「私が、あなたといつも共にいるから」。そう私たちの神さまは励ましてくださるのです。この励ましなくして、マリアは、その限界を耐えることはできなかつた。クリスマスとは、まさに、このようなぎりぎりの限界における福音、喜びの知らせであります。

みなさん一人ひとりには、人には言うこともできない、寂しさや辛さや不安があると思います。しかし神さまは、どんな時にも、必ず私たちと共にいてくださる。みなさん一人ひとりにも、神さまはこう語りかけておられます。「私は、必ず、あなたと共にいる。だから、あなたは何も恐れることはない。」良いクリスマスが皆さんと共にありますようにお祈りいたします。

(立教大学副総長・日本聖公会 中部教区司祭)